

2-6 主要環境資源（森林、天竜川、浜名湖、佐鳴湖、遠州灘）の現状と課題

ここでは、本市における主要環境資源として、森林、天竜川、浜名湖、佐鳴湖、遠州灘を取り上げ、それぞれについて、生活環境、自然環境、快適環境の特性並びに環境保全及び創造に向けた課題を整理します。

（1）森林

本市の森林面積は 10.3 万 ha であり、森林率は 68% で、市域のほぼ 3 分の 2 を森林が占めています。

このうち民有林は 8.1 万 ha で、その人工林面積は 6.2 万 ha になり、民有林の人工林率は 76% と県平均を大きく上回っています。そして、これら人工林のほとんどが伐採に適した林齢を迎えています。

また、民有林の天然林面積は 1.9 万 ha で、里山、人工林の中の植林不適地や奥山に分布しています。里山の天然林は、常緑広葉樹林化や管理されない竹林が増え、生物多様性の低下や景観の悪化などが懸念されています。

これら市北部の天竜区に集中している森林は、長い歴史の中で生まれ、良質な木材の供給による地域経済の活性化、森林の水源かん養などの働きにより市民生活を支えてきた重要な資源です。



【森林】

表 2-23 森林面積

区分	面積 (万 ha)	森林面積 (万 ha)	森林率 (%)	民有林		
				面積 (万 ha)	人工林面積 (万 ha)	人工林率 (%)
浜松市	15.1	10.3	68	8.1	6.2	76
静岡県	77.8	50.2	65	40.7	24.2	60

資料：浜松市森林・林業ビジョン（平成 17 年 3 月 31 日現在）

1) 生活環境（森林の公益的機能の評価）

森林には、水源かん養、国土保全などの公益的機能があります。

本市の森林が持つこれらの機能の評価を日本学術会議の試算をもとに算出すると、約 4,000 億円となり、本市の総予算額に匹敵するほどの額になります。

こうした森林の機能は、森林が適切に手入れされてはじめて発揮されるものです。林業の低迷などによって、林業家の経営意欲の減退や経営放棄が増えることで、間伐などの適切な手入れが行われなくなり、これら森林の公益的機能の発揮に支障が出る可能性があります。

表 2-24 森林の持つ公益的機能の評価額
～浜松市～

項目	評価額（億円）
①水質の浄化	1,327.5
②水資源の貯留	813.9
③表面侵食の防止	750.4
④洪水の緩和	383.3
⑤表層崩壊の防止	349.2
⑥野生鳥獣の保護	156.2
⑦保健やレクリエーション機能	93.2
⑧二酸化炭素の吸収	64.5
⑨化石燃料の代替	16.0
計	3,954.2

資料：浜松市森林・林業ビジョン

：日本学術会議の試算をもとに算出

2) 自然環境

市北部の森林では、下表のような貴重な動植物を見ることができます。なお下表は県版レッドデータブック植物編、動物編から北遠地域で確認されている貴重種(*)を抽出したものです。なお、カモシカはわが国の固有種で、国の特別天然記念物に指定されています。

表 2-25 北遠の森林の主な貴重種

区分	主な貴重種
植物	マツバラシダ、スギラン、ヒモラン、ヤマソテツ、タキミシダ、ナカミシラン、イチョウシダ、ヒロハアツイタ、ヒロハヤブソテツ、ツクシヤブソテツ、ヌカイタチシダマガイ、アツギノヌカイタチシダマガイ、ヒトツバシケンダ、コガネシダ、クラガリシダ、ミョウギシダ、ヒロハヒメウラボシ、ミヤマツチトリモチ、オオヤマレンゲ、シロモジ、フクジュソウ、オキナグサ、セツブンソウ、カギガタアオイ、ベニバナヤマシャクヤク、エゾハタザオ、コウヤミズキ、マツノハマネグサ、ヤシヤビシヤク、ミヤマトベラ、エンシュウツリフネ、チョウセンナニワズ、サクラスミレ、ミズキカシグサ、カインササラサドウダン、キョウマルシヤクナゲ、オオヤマツツジ、クリンソウ、シナノコザクラ、ハシドイ、ホソバツルリンドウ、ラショウモンカズラ、センリゴマ、コゴメヒョウタンボク、アキノハハコグサ、タカサゴソウ、チャボシライトソウ、コシノバイモ、キバナノアマナ、チャボホトトギス、ヒメシャガ、ミギワトダシバ、ヒナラン、イワチドリ、キンセイラン、ナツエビネ、ホテイラン、カンラン、ナギラン、コアツモリソウ、クマガイソウ、イチョウラン、ハルザキヤツシロラン、ヒロハツリシュスラン、ムカゴトンボ、エンシュウムヨウラン、セイタカスズムシソウ、クモイジガバチ、フウラン、カモメラン、ウチョウラン、ガンゼキラン、ツレサギソウ、オオヤマサギソウ、マツラン、モミラン、ムカデラン、イイヌマムカゴ、キバナノショウキラン
魚類	アカザ、ウツセミカジカ、カジカ、スナヤツメ、ホトケドジョウ、ヤマトイワナ
昆虫類	アオハダトンボ、オオイトトンボ、オオカワトンボ、キイロサナエ、タベサナエ、ウラナミアカシジミ、ウラジャノメ、ウラナミジャノメ、オオチャバネセセリ、オオムラサキ、オオヒカゲ、オナガシジミ、ギフチョウ、クモマツマキチョウ、クロシジミ、クロツバメシジミ、スジグロチャバネセセリ、シルビアシジミ、チャマダラセセリ、ヘリグロチャバネセセリ、ベニモンカラスシジミ、ホシミスジ、スルガセモンササキリモドキ
鳥類	アオバズク、アカショウビン、オオタカ、クマタカ、コノハズク、サシバ、サンコウチョウ、サンショウクイ、ハイタカ、ハチクマ、ブッポウソウ、ミゾゴイ、ミヤマホオジロ、ヤマセミ、ヨタカ
両生類	アカイサンショウウオ、アズマヒキガエル、ナガレタゴガエル、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオ
哺乳類	カワネズミ、キクガシラコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、カモシカ、ニホンザル、ヤマネ

資料：「まもりたい静岡県の野生生物」－県版レッドデータブック－ 植物編・動物編 2004年
静岡県自然保護室 羽衣出版

3) 快適環境

天竜区の森林には、スーパー林道天竜線が整備されています。天竜区東雲名から水窪ダムまでの総延長 52.9km のこの林道は、秋葉山 (866m)、竜頭山 (1,352m)、井戸口山 (1,335m)、門桁山 (1,384m)、麻布山 (1,685m) の尾根づたいに連なり、とても見晴らしがよくハイキングやもみじ狩りも楽しめる「森の回廊 (かいろう)」として、市民に親しまれています。スーパー林道の途中には、火伏せの神様として有名な秋葉神社や、山住神社、天竜の森・野鳥の森など、地域の歴史・文化や森の生



【天竜の森 (天竜区佐久間町)】

態にふれることのできるレクリエーション・スポットがたくさんあります。

天竜の森は、いまある森林をそのまま未来に伝えながら、市民・観光客が森と親しめるように遊歩道などが整備された、歩きやすい森となっています。ところどころの木々には名札や解説が付けられ、森を歩く人が学びながら楽しめるようになっています。

これらのほかにも、竹細工が体験できる竹の家（天竜区）や、木工作、野鳥観察、自然散策などができる県立森林公園（浜北区）など多くの拠点施設が整備されており、森や森林資源、森林環境に親しむ環境が充実しています。

4) 主要課題

市域の3分の2を占める森林は、「緑のダム」や「二酸化炭素の巨大な貯蔵庫」などにたとえられる水源かん養などの公益的機能を維持するうえで非常に重要な役割を担っています。そのため、市北部の中山間地域の地域経済を支える産業としての林業の振興とともに、森林の公益的機能を適切に維持していくことができる持続可能な森林経営を目指すことが求められています。

また、木材をはじめとする森林資源は再生産が可能な資源であるという特性にも着目して、森林資源の利活用による循環型社会を形成していくことも重要な視点です。

さらに、ここには、多くの動植物が生息しており、特に数の少なくなった貴重種を保護する一方で、ニホンザル、ニホンイノシシ、ニホンジカなどによる鳥獣被害対策も求められています。そのため、動植物の生息・生育環境を維持することと鳥獣被害の防止を両立させるための対策が必要になります。

そして、そのためには、市民が森林にふれ、森林のことをより深く学ぶような場や機会を増やし、市内天竜川の上流部と下流部が一体となった森林保全・利活用などの取組を展開することが重要です。

(2) 天竜川

天竜川は、国（国土交通省）が直轄管理する1級河川です。水源は長野県の諏訪湖で、幹川流路延長 213km、流域面積 5,090km² に及ぶ日本を代表する河川の一つです。

我が国屈指の急流河川である天竜川は、木曾山脈（中央アルプス）と赤石山地（南アルプス）の間を多くの支川を合わせながら南流し、遠州平野を経て太平洋に注いでいます。流域には多くの断層が走っており、急峻な地形とあいまって土砂流出の多い河川として知られています。



【天竜川】

市内を流れる天竜川の延長は 95km、支流は 42 河川でその延長は 305km に及びます。また、市内の天竜川水系には以下の4つのダムが建設されており、天竜川の豊かな水は水力発電に加えて、佐久間ダムからは豊川用水に、秋葉ダムからは三方原用水に、船明ダムからは天竜川下流用水にそれぞれ利用されています。

[天竜川水系のダム（浜松市内）]

- ・佐久間ダム（天竜区佐久間町佐久間）
- ・水窪ダム（天竜区水窪町地頭方）
- ・秋葉ダム（天竜区龍山町戸倉）
- ・船明ダム（天竜区船明）

1) 生活環境（水質）

天竜川本川の平成 18 年度の水質（BOD75%値）は、秋葉ダム発電第 2 取水口、鹿島橋、掛塚橋で、いずれも 1 mg/ℓを下回っており、良好な状態が維持されています。

しかしながら、水の流れが滞る佐久間ダム貯水池の水質（COD75%値）は 3.1mg/ℓで、環境基準（湖沼 A）を達成していません。

また、市内を流れる天竜川に流入している支流のうち、浜北区以南の流入河川は、その上流部の支流よりも水質が悪くなる傾向があります。

（水質観測結果については、「P17、2-2. (3) .1)天竜川水系の水質」参照。）

2) 自然環境

天竜川流域の植生について見ると、市内の天竜川の上流部では古くから植林が行われ、スギやヒノキの人工林が広がっています。溪流部の急峻な崖地にはシデ林やアカマツなどの自然林も多くみられます。また、下流部には、河畔や固定化した中洲にヤナギ群落などの樹林が形成されています。

天竜川には、貴重な淡水魚であるアマゴ、カワムツをはじめ多くの魚類が生息しています。また、遠州灘に注ぐ天竜川河口部は川幅が 1 kmほどの広さがあり、河川内の砂礫地は、カモメ科に属する小型の夏鳥で、国のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）に指定されているコアジサシなどの営巣地にもなっています。水際にはヨシ原があり、干潮時には砂質の干潟がごく狭い範囲に形成されます。このため野鳥が集まりやすく、カモメ類、ワシタカ類、カモ類などの冬鳥、秋の小鳥類やタカ類などの様々な野鳥を観察することができます。さらに、河口部は掛塚橋付近までは汽水域となっており、多様な動物が生息しています。

なお、平成 13～17 年度に実施された河川水辺の国勢調査によると、静岡県内の天竜川では植物 729 種、鳥類 92 種、魚類 56 種、昆虫類 1,560 種、両生類 4 種、爬虫類 6 種、哺乳類 9 種が確認されています。

表 2-26 天竜川沿いの主な動植物

区分	主な動植物
植物	スギナ、ワラビ、アカマツ、ネコヤナギ、ケヤキ、イタドリ、オシロイバナ、カワラナデシコ、コブシ、クスノキ、ナンテン、アケビ、ドクダミ、マタタビ、サカキ、ナズナ、ユキノシタ、ヘビイチゴ、ミヤコグサ、カタバミ、エノキグサ、サンショウ、ハゼノキ、カラスウリ、ヤツデ、ミツバ、カキノキ、ヒルガオ、エゴマ、オオバコ、キキョウソウ、コスモス、ヒガンバナ、ナガイモ、ツユクサ、ススキ
鳥類	カワウ、マガモ、カルガモ、トビ、キジ、カモメ、ウミネコ、アジサシ、コアジサシ、キジバト、カッコウ、ホトトギス、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、モズ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、スズメ、ムクドリ、ハシボソカラス
魚類	ウナギ、コイ、ギンブナ、タイリクバラタナゴ、オイカワ、ウグイ、ニゴイ、カワムツ、アブラハヤ、ギギ、ナマズ、アユ、アマゴ、スズキ、シマイサキ、クロダイ、ボラ、ボウズハゼ、ゴクラクハゼ、ウキゴリ、シマヨシノボリ、トウヨシノボリ、ヌマチチブ
昆虫類	オニグモ、ギンヤンマ、キリギリス、エンマコウロギ、トノサマバッタ、アブラゼミ、アメンボ、ツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、モンシロチョウ、ハナアブ、キイロショウジョウバエ、セスジゲンゴロウ、ヒメコガネ、ナナホシテントウ
両・爬・哺乳類	アマガエル、ウシガエル、シマヘビ、ヤマカガシ、アオダイショウ、コウベモグラ、ノウサギ、アカネズミ、タヌキ、キツネ、ニホンイノシシ、イタチ、ニホンジカ

資料：「平成 13～17 年度河川水辺の国勢調査」報告書

3) 快適環境

市内を流れる天竜川の上流部では、周囲の緑豊かな山並みの中、観光川下りやカヌーなどの水面レジャーを体験することができます。また、佐久間ダムを始めとする発電ダムが連続して存在し、その一つである船明ダムの湖面では、漕艇場や漕艇競技の付属施設が設置され、広く活用されるとともに、湖畔には公園が整備され桜の開花に合わせた各種イベントが行われています。

下流部に下ると、河川敷が広く公園・緑地として利用され、市民に開放されています。野球やサッカーなど各種スポーツ施設が整備され、市民のスポーツ、レクリエーション、憩いの場として利用されています。

このほか、浜北区の「遠州はまきた飛竜まつり」では、河川敷が大凧をあげる会場として利用されており、大勢の観客が訪れています。また、グライダーの滑空場があり、天竜川を背景にゆったりと大空を飛ぶグライダーを見ることができます。



【天竜舟下り】

4) 主要課題

天竜川は、合併によって拡大した本市域をつなぐシンボリックな存在で、本市を代表する貴重な環境資源であることから、市内の天竜川上流部と下流部が連携した環境施策が求められています。

また、天竜川は、豊かな歴史や伝統文化をはぐくむ基盤となってきたといっても過言ではありません。こうした歴史や伝統を後世に伝えるために人材や基盤環境を守り育てることも求められています。

一方、暮らしの視点では、特に市内の天竜川下流部において、天竜川本流に流入する河川の水質改善が必要です。前述のとおり、天竜川本流の水質は比較的良好な状態を維持していますが、下流部の流入河川は必ずしも良好な状態とはいえません。生活排水対策などを中心に、水質改善の取組をさらに強化していく必要があります。

また、天竜川が地域に暮らす人々の生活に役立つよう、豊かな環境を活かした産業振興の取組や、市民が貴重な環境資源としての理解を深めるために環境教育・環境学習を推進していくことも重要な課題といえます。

なお、天竜川のダムで進行している大量の土砂の堆積は、貯水容量の低下を引き起こすほか、遠州灘海岸の侵食の一因として考えられています。これに対し生態系への影響に配慮しながらダムの堆砂対策への早急な対応が求められています。

(3) 浜名湖

かつては「とおつあはうみ」と呼ばれ、遠江の語源となった浜名湖は、天竜川とならんで本市を代表するシンボルであり、貴重な環境資源です。

現在の浜名湖は、幅 200m の今切口で遠州灘とつながり 1 日 2 回の潮位変動によって海水が出入りする汽水湖で、湖水面積は 70.4km² (全国 10 位)、周囲は 128km (全国 3 位) です。

その形は、五指を広げたような入りくんだ姿をしていることが特徴で、市の西部を流

れる都田川水系の一部を構成しています。

浜名湖の最大水深は湖心部で 13.1mですが、大半は 5 m前後で全体的に浅く、この浅瀬には縦横に濤筋（航路）があり、これを伝わって外海からの潮が動いています。今切口では干満によって 1日に約 4,000万トンの海水が出入りし、その流速は毎秒約 2 mに達しています。

浜名湖は海に近い湖でしたが、もとは湖面の方が海面より高く、浜名湖より流れ出る川を海水が逆流するようなことはありませんでした。

しかし、明応7年（1498年）に起きた大地震に伴う地盤沈下により、湖面が下がって海水が流入しやすくなり、その後の度重なる暴風雨による土砂災害のために浜名湖から流れ出ている川が埋まり、浜名湖に水が溜まるようになりました。その結果、浜名湖と海を隔っていた地面の弱い部分が決壊し現在のような汽水湖となったという歴史を持っています。 [附属湖] 庄内湖、引佐細江湖、猪鼻湖、松見ヶ浦



【浜名湖】

1) 生活環境（水質）

本市区域の浜名湖の調査地点では、湖心が海域 A、猪鼻湖、白州、塩田が海域 B の環境基準点となっており、平成 18 年度の水質観測（COD75%値）によると、4 地点とも環境基準を達成しています。また、環境基準点となっていない雄踏、湖口、気賀においても、おおむね良好な水質にあるといえます。

流入河川の水質を見ると、都田川については、環境基準点である落合橋では環境基準（河川 A）を、伊佐地川は中之谷橋で環境基準（河川 B）を達成しています。

猪鼻湖、引佐細江湖、庄内湖など、浜名湖内湾でも特に閉鎖性が強い水域は、一旦汚濁物質が入り込むと蓄積されやすい構造となっています。特に猪鼻湖は、浜名湖の湖心と比較すると水質観測値（COD75%値）が依然高いことから、一層の浄化対策を講じることが求められています。

（水質観測結果については、「P18、2-2. (3) .3) 浜名湖及び流入河川の水質」参照。）

2) 自然環境

海水、淡水の影響を受ける浜名湖には魚類 401 種、エビ類 51 種、カニ類 93 種、軟体類 105 種の計 650 種の魚介類が生息しています。浜名湖は県内唯一のノリ、カキ、クルマエビの漁場で、また、日本で数少ないノギリガザミ（ドウマン）の漁場の一つです。

浜名湖の周辺には養魚池、水田、草地や森林が接し、水深も 10m 近い湖北部と 1～2 m 程度で干潟が現れる湖南部とで差があり、変化に富む環境が多く野鳥の生息を可能にしています。さらに沿岸の水域には、魚のゆりかごと言われるアマモ場が広がり、多くの魚介類の生息場になっています。一方、浜名湖は塩水化が進む傾向にあり、汽水環境を好む魚種の減少や、外海環境を好む魚種の増加が目立つようになっています。

湖北部の引佐細江湖、猪鼻湖、松見ヶ浦、内浦は鳥獣保護区に指定されていて、冬期には 10 数種のカモ類が湖面に姿を現しています。スズガモやホシハジロでは 1 万を超える大群がみられたこともあります。沿岸の大部分でコンクリート堤防が築かれていますが、後背の水田や草地は小鳥類の生息場所となっています。

表2-27 浜名湖にみられる主な魚介類及び鳥類

区分	主な魚介類・鳥類
魚類	コノシロ、マイワシ、カタクチイワシ、スズキ、クロダイ、コトヒキ、ヒイラギ、キチヌ、ネンブツダイ、キュウセン、シマイサキ、シロギス、マアジ、ウナギ、マアナゴ、コイ、サヨリ、ボラ、セズジボラ、ヨウジウオ、タツノオトシゴ、ハオコゼ、アサヒアナハゼ、アイナメ、コチ、ギンポ、イソギンポ、マハゼ、ヒメハゼ、スジハゼ、シマハゼ、チチブ、アミメハギ、ウマヅラハギ、クサフグ、ネズミゴチ、ハタタテヌメリ、マコガレイ、イシガレイ、アイゴ、ゴンズイ
エビ類	クルマエビ、ヨシエビ、イソスジエビ、テッポウエビ
カニ類	ケフサイソガニ、イシガニ、ジャノメガザミ、ガザミ、ノコギリガザミ、ホンヤドカリ、ツメナガヨコバサミ、ユビナガホンヤドカリ
貝類	アサリ、バカガイ、カガミガイ
鳥類	コアジサシ、カワウ、コサギ、スズガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、オナガガモ、カルガモ、チュウシャクシギ、ハマシギ、メダイチドリ、シロチドリ、セグロカモメ、ユリカモメ

資料：「はまな湖」（平成17年3月改訂／浜名湖の水をきれいにする会）

湖南部では、弁天島周辺で干潮時に干潟が現れ、春・秋季にシギ、チドリ類の格好の休息場となっています。また、絶滅危惧種のコアジサシが、弁天島沖のいかり瀬で集団的営巣地（コロニー）をつくることがよく知られています。

なお、浜名湖の沿岸には廃養鰻池が点在し、これに適度にアシ原が生じ、湿地や沼地を好むカモ類、シギ類などの鳥類には好適な生息場所となっています。しかしながら、これら廃養鰻池の多くは現在埋め立てられ減少してきているのが現状です。

3) 快適環境

浜名湖は、複雑な入り江、背後の山並みなど地形的にも非常に美しく、訪れる季節や時刻によって多彩な景観を提供しています。

ノリ、カキ、ウナギ、アサリ、クルマエビ、ガザミ、ノコギリガザミといった魚介類などの漁場でもある浜名湖では、潮干狩り、海水浴、釣りのほか、ヨットやモーターボートなどのレクリエーションも非常に盛んです。



【潮干狩り】

北部には、フラワーパーク、動物園、遊園地、館山寺温泉などが位置し、市を代表する観光拠点の一つとなっています。

4) 主要課題

浜名湖は、天竜川と並んで本市の貴重な環境資源であり、その豊かな環境を保全するとともに、失われた環境を再生しながら、次の世代に引き継いでいくことが求められています。

県では、浜名湖の豊かな水環境を守るため、「うるおい」と「やすらぎ」のある浜名湖を創造するための基本計画となる「浜名湖水環境保全計画」を平成13年3月に策定しました。本市も国、県はもとより、関連自治体、市民、事業者、関係団体などと協力して、浜名湖の保全・活用に総合的に取り組んでいく必要があります。

そのためには、浜名湖の汚濁物質の負荷量を調査し、流域住民、事業者などとともに

水質保全対策を推進することが必要です。また、健全な水の循環と多様な生態系を確保・維持するために、干潟などの湿地や、流域の森林や緑地を保全し、動植物の保護・育成に取り組むとともに、市民が水辺に親しむ機会を確保するために、親水空間の保全・創造、水辺の管理などに取り組むことも求められています。

(4) 佐鳴湖

佐鳴湖は、二級河川新川の中流部に位置し、長さ 2.3km、幅 0.6km、周囲 5.5km、湖水面積 1.20km²、平均水深約 2 m（最大水深 2.5m）の天然湖沼で、全体として浅い舟底型をしています。

満潮時には浜名湖の海水が新川に沿って遡上することから、海水が混じる汽水湖となっています。主な流入河川は、段子川、新川、御前谷排水路の 3 河川で、流出河川は新川です。



【佐鳴湖】

市街地の近郊という交通の便の良いところに位置する一方で、多くの自然が残っていることから、散歩、ジョギング、釣り、バードウォッチングなどの自然観察など、市民の憩いの場として親しまれています。

1) 生活環境（水質）

佐鳴湖の水質は、昭和 49 年度をピークとして改善されてはきたものの、環境基準（湖沼 B）は依然として達成できていません。佐鳴湖拓希橋の平成 18 年度の COD75%値は 13mg/l で、環境基準（湖沼 B）の 5 mg/l にはほど遠い状況です。

佐鳴湖への流入河川は、BOD 75% 値はいずれも比較的良好な数字ですが、全窒素については高い数字を示している河川もあります。また、佐鳴湖に流出入する新川（志都呂橋）は、環境基準（河川 C）を達成できていません。これは、佐鳴湖と新川が潮汐の影響により連動して、水質汚濁が進んでいることが原因と考えられます。

こうした佐鳴湖の水質汚濁の原因としては、窒素やリンの濃度が高まる富栄養化現象^(*)が生じていること、流域の市街化が進行したことにより流入水量が減少し湖水の入れ替わりが悪くなってきていることなどが考えられています。しかし悪臭の原因となりうるアオコについては塩分濃度の上昇が一因となり減少しています。

（水質観測結果については、「P19、2-2. (3) .4 佐鳴湖及び流入河川の水質」参照。）

2) 自然環境

佐鳴湖周辺の里山には身近な自然が残されており、動植物の生息地としてまた、環境学習の場として貴重な存在となっています。魚類や鳥類のほかにもモグラやアブラコウモリなどのほ乳類の生息も確認されています。

水生昆虫ではトンボ類が多く確認されています。また、湖面は鳥獣保護区に、周辺は狩猟禁止区域に指定され野鳥の楽園となっています。季節毎に様々な鳥が飛来し、冬期には越冬のために渡ってくる冬鳥が数多く生息しています。

魚類については、浜名湖とほとんど水位差がないことから、淡水性魚類のほかに汽水性魚類も生息していることが特徴です。

表2-28に、佐鳴湖でみられる代表的な動植物を記します。

表2-28 佐鳴湖の主な動植物

区分	主な動植物
植物	クロマツ、アカマツ、ヤマザクラ、ゴンズイ、タブノキ、スギナ、カニクサ、イヌシダ、ベニシダ、トウゴクシダ、トウカイタンポポ、セイヨウタンポポ、シロツメグサ、ノコンギク、テイカカズラ、キツタ、アケビ、スイカズラ、サネカズラ、ヨシ、マコモ、ダンチク、ガマ、ヒメガマ、ヒトモトススキ、フトイ、ウキヤガラ、クロモ
魚類	モツゴ、ニゴイ、コイ、ゲンゴロウブナ、ギンブナ、ナマズ、ボラ、シマイサキ、ウナギ、ハクレン
甲殻類	ヌマエビ、アメリカザニガニ、テナガエビ、モクズガニ
昆虫類	アオモンイトトンボ、シオカラトンボ、ノシメトンボ、ウチワヤンマ、オオシオカラトンボ、コフキトンボ、モンキアゲハ、キアゲハ、モンキチョウ、ツマキチョウ、シマゲンゴロウ、ヒメゲンゴロウ、ミズスマシ、アメンボ、ユスリカ
鳥類	カワウ、コサギ、マガモ、ハシビロガモ、ミコアイサ、カワセミ、ユリカモメ
両生類	アマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ヒキガエル
爬虫類	クサガメ、ミシシippアカミミガメ、イシガメ、シマヘビ、マムシ、ニホンイモリ
哺乳類	コウベモグラ、アブラコウモリ、ノウサギ、アカネズミ、タイワンリス、ニホンタヌキ、ホンDOIタチ、ハクビシン

資料：「よみがえれ佐鳴湖」（平成16年9月発行／環境保全課）

3) 快適環境

佐鳴湖は、市街地に近いことから、市民にとって非常に身近な憩いの場です。

佐鳴湖の周囲には、42.65haの佐鳴湖公園があり、自然環境に重点を置いて整備され、緑も多く、野鳥の観察スポットとしてもよく知られる公園となっています。水遊びや釣りを楽しむこともでき、西岸には根川湿地と呼ばれる人工的に復元した湿地帯が広がり、多くの小動物が観察できる環境も整えられています。



【佐鳴湖公園】

また、市民の憩いの場・レクリエーションの場のほかに、様々なイベントや自然保護団体などの活動の場として利用されています。

公園を中心とした佐鳴湖の周囲は本市の桜の名所で、毎年の花見シーズンには多くの花見客が訪れます。また、佐鳴湖の水質浄化事業の一環として、毎年夏には佐鳴湖花火大会が催され、湖と花火のマッチングが美しく評判の花火大会となっています。

4) 主要課題

佐鳴湖は、全国湖沼水質ランキング（化学的酸素要求量＝COD）で平成13年度以降ワースト1が続いています。この水質を改善していくことが緊急の課題です。

佐鳴湖は、平成5年7月に全国24ヶ所の一つとして、清流ルネッサンス21事業の対象地域に選定され、水環境改善のための事業に精力的に取り組み、平成12年度に事業は終了しました。引き続き平成13年度からは清流ルネッサンスⅡ事業^(*)が国に認められ、清流ルネッサンスⅡ佐鳴湖地域協議会によって、平成16年6月には「清流ルネッサンスⅡ行動計画」が策定され水環境改善に取り組んでいます。

同計画では、将来の佐鳴湖の姿を、「水がゆたかできれいな佐鳴湖」、「美しい佐鳴湖」、「楽しい佐鳴湖」、「誇れる佐鳴湖」、「ホタルやシジミがいる佐鳴湖」と設定し、この目指す姿を実現するために、『水質』、『水辺環境』、『環境意識』の3点を掲げ、水質改善目標、水辺環境保全目標、環境意識向上目標を設定しています。

そこで、本市としても、「清流ルネッサンスⅡ行動計画」の目標を達成するため、公共下水道整備、単独処理浄化槽から合併処理浄化槽への切り替え、高度処理型合併処理浄化槽^(*)の普及、さらには家庭でできる生活排水対策の普及など、生活排水の未処理排出を防止するための取組をさらに推進していくことが必要です。

また、県との連携により、湿地型浄化施設の設置、下流新川の河道に溜まっている汚泥の浚渫・除去など、流入河川の環境整備・浄化事業に積極的に取り組むことも求められています。

(5) 遠州灘

遠州灘は、御前崎から伊良湖岬まで 117km におよぶ、全国でも有数の長大な砂浜海岸となっています。中田島砂丘に代表される砂丘の幅は 50～200m もあり、海岸防災林で覆われています。これらは、古来より悩まされてきた海岸災害から背後地を守る盾として営々と築き上げられてきたものです。



【遠州灘】

1) 生活環境（水質）

馬込川沖、浜名湖沖とも、平成 18 年度の COD75% 値はそれぞれ 1.0 mg/l、1.5mg/l で、環境基準（海域 A）を達成しており良好な水質を維持しています。

（水質観測結果については、「P20、2-2. (3) .5) 遠州灘の水質」参照。）

2) 自然環境

遠州灘沿岸の砂浜にはコウボウムギ、ハマヒルガオ、ハマエンドウ、ハマニガナ、汀線付近にはオカヒジキなどの海浜性植物がみられます。砂丘の背後には防潮林としてクロマツ林が広がっています。

遠州灘沿岸はまた、全国的にも有数のアカウミガメの上陸・産卵地であることでよく知られています。アカウミガメは、国のレッドデータブックでは絶滅危惧ⅠB 類（近い将来における絶滅の危険性が高い種）に指定されています。

その他の動物では、同じく絶滅危惧Ⅱ類に指定されているコアジサシが産卵に訪れます。また、馬込川河口付近のヨシ原は日本最大級のツバメのねぐらともなっています。

3) 快適環境

天竜川河口部から浜名湖今切口までの約 16.5km の海岸線は全国的にも有数の砂浜海岸です。広々とした砂浜と松林は雄大な太平洋の景観とともに、市民に愛されています。

馬込川と芳川の合流点の中田島北地区には、遠州灘に連なる中田島砂丘の周辺地区をあわせて総延長約 1.5km、面積 670ha の遠州灘海浜公園が整備されています。ここには遠州灘海岸の海浜環境を活かした、野鳥の森やピクニック広場、サッカー場などがあり、日常的なスポーツ・レクリエーションの場として、広く市民に利用されています。また、ここは毎年 5 月に、凧揚げ合戦で有名な、本市を代表する伝統行事である浜松まつりの会場となり、多くの観客で賑わいます。

この遠州灘海浜公園に接して日本三大砂丘の一つである中田島砂丘があり、遠州灘から吹く風により形成された美しい風紋を見ることができます。

4) 主要課題

遠州灘海岸は、ダムによる天竜川からの土砂供給の減少などが原因となって砂浜が急速に後退しています。この海岸侵食は景観を損なうばかりでなく、砂浜の持つ自然防護機能を低下させ、高潮などにより沿岸住民に浸水被害を及ぼす危険性があります。これに対し県では離岸堤の設置や養浜工事を、あわせて国ではダムに貯まった土砂を排出する対策を実施・計画しています。この問題は被害も対策も大きな広がりを持つため、生態系への影響を考慮し市民の理解を得ながら、国や県に協力し早急な対応を図る必要があります。



【海岸侵食】

一方で、市民団体による砂丘の維持を目的とした堆砂垣の設置や、市民参加による松林の中にたまった砂を浜に戻すためのバケツリレーの開催などの市民活動のさらなる推進を図ることも必要になります。

また、全国的にも有数のアカウミガメの上陸・産卵地としての自然環境を守り、美しい海岸を保全することがもう一つの課題となっています。